第２章　豊富なインタラクションを目指した授業づくり　【小学校外国語活動】

１　基本的な考え方

(1) 小学校外国語教育に求められているもの

平成 32 年度に全面実施される小学校学習指導要領の外国語、外国語活動では、「言語活動を通して，コミュニケーションを図る基礎（外国語活動では素地）となる資質・能力を育成することを目指す」ことが目標とされている。また、それぞれ指導計画の作成と内容の取扱い（１）のアで、「単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際，具体的な課題等を設定し，児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら，コミュニケーションの目的や場面，状況などを意識して活動を行い，英語の音声や語彙，表現などの知識を，五つ（外国語活動では三つ）の領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること。」と述べられている。

これらは、中教審の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び 特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」(2016) の「現行学習指導要領の成果と課題」の中で、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。」と述べられているのに応じて、実際のコミュニケーションにおいて活用できる外国語活用能力の向上を目指し、学び方を改善しようとするものであると考える。そしてその改善のキーワードが「主体的・対話的で深い学びの実現」にあることは言うまでもない。

例えば、ベネッセコーポレーションが 2015 年に行った学習基本調査によると、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）に関連すると考えられる活動を多く行っている学級の児童の方が肯定率が高く、興味・関心の広がりにもつながっていることが見て取れる（表１）。

表１　興味・関心の広がり
（学級ごとの AL 活動の実施程度別）

	AL活動		
	多学級	中学級	少学級
英語を使って外国の人と話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい	62.8	61.0	50.9
世界のさまざまな地域の文化や社会をもっと知ってみたいと思う	75.9	66.1	56.6

「よくある」＋「時々ある」の比率(%)

今回の研究では、特に深い学びの実現に焦点を当てている。「小学校外国語活動・外国語　研修ガイドブック」(2017) では、「外国語教育における、深い学びとは、①コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて思考力・判断力・表現力等を発揮する中で、言語の働きや役割に関する理解や外国語の音声、語彙・表現、文法の知識がさらに深まり、それらの知識を聞くこと、読むこと、話すこと、書くことにおいて実際のコミュニケーションで運用する技能がより確

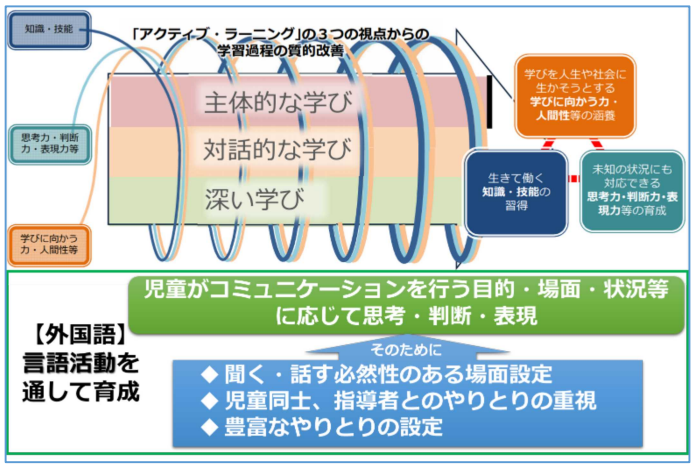


図１　主体的・対話的で深い学びの過程と小学校外国語における資質・能力の育成イメージ

実なものとなるようにすることや、②深い理解と確実な技能に支えられて、外国語教育において育まれる『見方･考え方』を働かせて思考･判断･表現する力が活用されるようにすることである。」と述べられている。

これらのことから、例えば、即興的な要素を含んだペアワークや多数の友達とやり取りする必然性のある活動等、豊富なインタラクションが必要となる場面を設定し、その活動に向けて、指導者がねらいを明確にした授業デザインの更なる向上を図ることが今後の小学校外国語教育で求められると考える。

(2) 先行研究から

川井田、楠山、立岡（2016）は、コミュニケーション能力の素地を養うための方略的能力（正しい英語を使えなくても，知っている英単語や，ジェスチャーを使って，なんとかして相手に伝えようとする能力）と情意的素地（「なんとかわかり，伝えようとする態度」「間違いを恐れない態度」「言葉や文化の違いや共通性への興味」）を重視した授業づくりのポイントとして、①素材・話題そのものへの興味・関心、②異文化・自国の文化への気付き・発見、③相手に伝えたい情報・思い←自己表現、④相手から得たい情報・思い←他者理解、の四つをあげ、児童が自らコミュニケーションをとりたいと思うような場の設定とコミュニケーション活動を行う際の個々の児童への関わりに注目した実践を行っている。

その中で、「『コミュニケーション能力の素地』を養うためには，児童が何とかして相手に伝えようとするような場の設定を行う必要がある。その根底には，個への関わりがあり，それぞれの児童に適した指導を行うことが大切になる。そのコミュニケーションの場面において，自分のことを相手に伝える自己表現，相手の言っていることを理解する他者理解を繰り返し行っていくことも欠かせない。そのようなコミュニケーションは，話題への興味・関心や，異文化・自国の文化への気付きが出発点となって始まったり，コミュニケーション活動の中で高まったり，深まったりする。これを繰り返すことで，『コミュニケーション能力の素地』を養うことにつながると考える。」と述べられている。

これは、向後（2016）が小学校外国語活動とアクティブ･ラーニングについて留意点として挙げている、「聞く・話す必然性のある場面設定」「児童同士、指導者とのやり取りの重視」「豊富なやり取りの設定」の重要性に通じるものであると考える。これらのことから、児童の「聞きたい・伝えたい」という気持ちを大切にした魅力的な活動を設定し、各授業での中心表現や既習表現を総動員して、思考・判断・表現する授業づくりを目指して今回の実践へとつなげていくこととする。

２　研究目的

本研究では、豊富なインタラクションを実現する言語活動を核として、児童が英語を用いてそれぞれの考えや気持ちを伝え合う機会をより多くもてるように単元全体を見通した授業を設計していく。そして、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて思考・判断・表現する英語でのやり取りが豊富となるように言語活動を工夫すれば、主体的・対話的で深い学びが実現できる。」という仮説のもと、外国語活動の授業実践を行い、児童の学びの変容を見取る。

３　研究内容

(1) 研究期間　平成 29 年５月～12 月

(2) 研究対象　大和郡山市立矢田南小学校　第５学年２組　児童 28 名

(3) 研究方法　○アクティブ・ラーニングの視点からの授業実践

○児童質問紙調査実施（６月、12 月）、及び分析

児童の実態を把握するとともにその変容を見取る。

○児童観察及び振り返りシートの分析

４　アクティブ・ラーニングの視点からの授業実践

(1) 実践前の研究対象校の実態

研究対象校では、１～４年生は学期に一度、５～６年生では月に一度、ＡＬＴが外国語の授業に入っている。児童は、１年生から外国人と英語を使ってコミュニケーションをとる経験をしている。これまでに、ＡＬＴと共に行う授業スタイルは、「Hi, friends! 1」で取り上げている単語を繰り返し練習したり、新出表現を学びＡＬＴと一対一でやり取りをしたりする等、席に座ったまま行われる活動が中心であった。また、授業中の指示や説明は全て英語で説明が行われるため、めあてや振り返りの内容が十分に理解できておらず、目的がよく分からないまま活動している様子の児童がいた。学級担任が授業をする時は、ＡＬＴがやり残した課題をしたり、何度も表現の復習に取り組んだりすることが多かった。

児童は、手振りをつけて大きな声で英語の歌を歌ったり、チャンツを楽しんだりする等、意欲的に授業に取り組む様子が見られる。その一方で、英語を使って、教員や友達とやり取りをする場面では、文法や発音が合っているのかを気にして声が小さくなり、英語でのコミュニケーションに自信がない様子だった。また、多数の児童が、これまでに学んだ表現や単語を使って質問しても、何を尋ねられているのかを理解できておらず、学びが定着しにくいようであった。６月に実施した質問紙調査では、「17 自分が話した英語が伝わったり、相手の話す英語が理解できたりするとうれしい。」の質問項目について、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をしている児童は 28 人中 21 人、75%だった。一方で、「１英語で会話することが得意な方だ。」の質問項目について肯定的な回答をしている児童は 28 人中４人、14%だった。また、「15 英語で、もっとうまい言い方や別の表現はないかと考える」の質問項目について肯定的な回答をしている児童は 28 人中７人、25%であった。これらの回答から、児童は相手に何かを英語で伝えたい、相手が英語で話していることを理解したいという意欲はもっているものの、英語でコミュニケーションをとることに自信をもつことができず、そのことを苦手だと感じている児童が多いことが分かった。

(2) 本研究での取組

児童が自信をもって英語でコミュニケーションをとることができるように、各単元の目標（～を聞いたり、話したりすることができる、～を意識して発音できる等）の達成を目指すとともに、児童が授業での学びが身に付いたと実感し、それを積み重ねていくことで、自信をもって教員や友達とコミュニケーションをとることのできる態度を育成すること、また英語でのコミュニケーションに苦手意識をもつ児童の意欲と自己評価を向上させることを目標とした。「主体的・対話的に深く学ぶ」過程を通して、児童が一層資質・能力を身に付けられる授業を目指し、その手立てとして、次のようなことを行った。

① 簡潔明快で達成しやすいめあてを示し、学習に対する見通しをもたせるために、ルーブリック形式での目標提示

② 学びや疑問を振り返らせる時間の設定と、振り返りシートの開発
③ 学んだ表現を蓄積していくためのワークシートの開発
④ 児童が友達と既習表現を用いて自由に会話できるイングリッシュ・タイムの導入
⑤ 見通しをもたせるために、１時間の流れのパターン化（歌、イングリッシュタイム、前時の復習、新出語彙や表現の紹介、アクティビティ、振り返りシートの記入）
⑥ 興味関心を高め、主体的な活動に導くためのＩＣＴ活用
⑦ 学習の雰囲気を高めるため、クラスルーム・イングリッシュの積極的な活用、リズムに乗せた単語練習
⑧ 新出表現を積極的に使いたいと思える魅力的なアクティビティの設定

この中で①②では、めあてやルーブリックを振り返りシートに印刷し、児童が常に目標を意識できるように工夫した。振り返りシートは児童が記入を行なった後に回収し、個々の児童の振り返りを集約することで、今後の授業改善に役立てた。③④では、今までに学んだ単語や表現を使わせることで、学びが積み重なっているという実感をもたせたいと考えた。⑥では、ＩＣＴ機器を用いて英語の正しい発音を聞かせ、それを真似て発音するように指導した。日本語読みにならないように、英語での発音を意識している児童を取り上げて褒めることで、発音を意識する意欲を高めたいと考えた。⑧では、児童が自らコミュニケーションをとりたいと思うような目的や場面、状況を設定し、「何とかして英語を使って相手に伝えたい」という思いのもとで活動できるようなアクティビティを導入した。

また、「主体的・対話的で深い学び」を通しての単元の目標達成に向け、教員自身の見通しを明確にした授業を組み立てるため、アクティブ・ラーニングプランニングノートを作成して計画を立てた。アクティブ・ラーニングプランニングノートは、教員が「主体的・対話的に深い学び」の過程を意識して授業をデザインすることを目的としたもので、立案した授業を、１時間ごとに「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点で整理し、改善することができる。改善に際しては、三つの視点を満たし、言語活動の質を高めていけるように留意した。

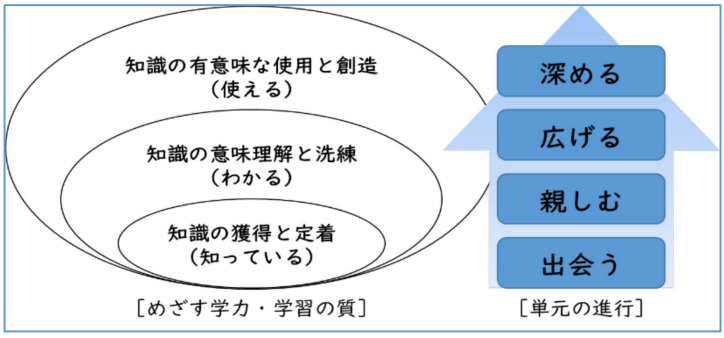


図２　ねらいと単元の基本的な進行のイメージ

(3) 授業実践事例

ア　実践①

使用教材：Hi, friends! 1
単　　元：Lessen５ What do you like?

(ｱ) アクティブ・ラーニング　プランニングノート

学年	５年	教科	外国語活動	単元	関・意・態：好きなものについて、積極的に伝えたり尋ねたりしようとする。 慣れ親しみ：色や形、好きなものは何かを尋ねる表現に慣れ親しむ。 気付き　　：日本語と英語の音の違いに気付く。
単元	Lessen５ What do you like?			目標	

《付けたい力》

【学びにかかわる子どもの実態】	【この単元で付けたい力】	【付けたい力のための活動】
積極的にゲーム等に取り組むが、やり取りや発表となると自信をもって声を出せない。	“What do you like?”を用いて、好みを伝えたり、聞いたりすることができる。	・友達にインタビューをする活動 ・発音、発声をする活動

《評価規準》

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
① 意欲的に友達とコミュニケーションをとっている。 ② 主体的に新しい表現を知り、練習をしている。	① 新しい表現を知り、進んで使おうとしている。	① 新しい表現を知り、日本語や他の言語とのちがいに気付いている。

《計画》

	学　習　活　動	評価	場面	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
1	**色や単語を表す単語を学ぼう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ 新出単語(形・色) ・ ポインティングゲーム ・ Let's listen! ・ 振り返りシートの記入	気付き 観察・振り返りシート	出会う見通す	・目標提示から学習の見通しをもつ。 ・リズムに乗って主体的に新出表現を学ぶ。	・教員からの質問に、既習単語や表現を用いて答える。	・triangle や star 等、普段何気なく使っている単語の意味に気付く。
2	**What do you like?の表現を知り、使ってみよう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ DVD 教材「Enjoy English!」を視聴し、「What do you like?」の意味を考える ・ Let's listen! ・ Let's chant! ・ 振り返りシートの記入	慣れ親しみ(音声) 観察・振り返りシート	親しむ	・DVD 教材「Enjoy English!」での対話の場面を見て、「What do you like?」の意味を考える。 ・新出単語を用いて、Let's listen の問題を考える。	・教員からの質問に、既習単語や表現を用いて答える。	・チャンツをして、発音について知る。
3	**What ○ do you like?の表現を使い、クラスの友達にインタビューをしてみよう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ 対話の様子より、○の中に入る単語を考える ・ Who am I?インタビュー ・ Who am I?クイズ ・ 振り返りシートの記入	慣れ親しみ(表現) 観察・振り返りシート	広げる	・Who am I?クイズのインタビューにて、学んだ表現を用いて友達にインタビューをする。	・前時に学んだ表現をもとに、○に入るものをグループで考える。	・○に入る単語を変えるだけで、相手の好きなものについて、様々な質問ができることを知る。
4	**What ○ do you like?のインタビューをして、クラスのランキングを当てよう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ アクティビティ「クラスの色･形ランキングのトップ３を当てよう！」 ・ ランキング発表 ・ 振り返りシートの記入	関心・意欲・態度 観察・振り返りシート	深める	・既習表現を用いて、積極的にインタビュー活動をする。 ・インタビュー結果をもとに、グループで結果を予想する。	・「I think」を用いて、自分の考えを相手に伝える。 ・ランキングを集計する際の、教員からの質問「What ○ do you like?」に答える。	・学んだ表現を用いることで、インタビューができることを知る。

《授業者の振り返り》

- 外国語が苦手な児童も、グループの友達に表現を確認しながら、何度もインタビュー活動に取り組むことができていた。
- 振り返りシートには「インタビューが面白かった」、「クラスのランキングを考えるのが楽しかった」等、関心をもってアクティビティに取り組めていたと考えられる記述が多くあった。また、「発音を意識することができなかった」と記述している児童もいた。目標を達成することはできなかったものの、めあてを意識して授業を受けることができていたと考えられる。
- 「何度も発言することで、英語が難しくなくなった」と記述している児童がいた。今後も、児童が学んだ表現に繰り返し慣れ親しむことのできる場面を多く設定していきたい。

(イ) 本時の展開

<table>
<tr><th>学習活動</th><th>指導上の留意点</th><th>【評価規準】（評価方法）</th></tr>
<tr><td>warm-up</td><td>・クラスルーム・イングリッシュを用いて、英語を学ぶ雰囲気をつくる。
・既習単語や表現を用いて任意の児童に質問をし、それに答えさせる。</td><td></td></tr>
<tr><td>単語・表現の復習</td><td>・リズムに乗せて単語練習をする。
・ＩＣＴ教材を活用し、視覚や聴覚に訴える。
・本時のめあてやルーブリックを提示し、学習の見通しを確認できるようにする。</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">アクティビティ「クラスの色・形ランキングのトップ３を当てよう！」</td><td>・グループで協力させる。
・ゲーム性のあるインタビュー活動を行うことで、学んだ表現をたくさん使わせる。</td><td>・友達の好きな色や形について、学んだ表現を用いて積極的にインタビュー活動をしている。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】</td></tr>
<tr><td colspan="2">アクティビティ「クラスの色・形ランキングのトップ３を当てよう！」の内容
４人１組のグループで、クラスの好きな色・形ランキングのトップ３を予想し、ポイントを競い合うアクティビティである。予想するために、５分間「What ○ do you like?」の表現を用いて、他のグループのメンバーにインタビューをする。つまり、たくさんの人数にインタビューをすることができれば、ランキングの予想がしやすくなる。グループ対抗で行うため、英語が苦手な児童にも積極的にやり取りをさせることがねらいである。

図３　インタビューの様子

図４　グループの予想</td></tr>
<tr><td>ランキングの発表</td><td>・任意の児童に「What ○ do you like?」と尋ねることで、それぞれの形・色を選んだ児童の数を集計する。</td><td>・「What ○ do you like?」という教員からの質問に対し、「I like ○○.」という表現を用いて答えている。【外国語への慣れ親しみ】</td></tr>
<tr><td>振り返りシートの記入</td><td>・最初に提示しためあて（ルーブリック）を再度確認し、学習内容を振り返らせる。</td><td></td></tr>
</table>

イ　実践②

使用教材：Hi, friends! 1

単　　元：Lessen７ What’s this?

(ｱ) アクティブ・ラーニング　プランニングノート

学年	５年	教科	外国語活動	単元	関・意・態：ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり、答えたりしようとする。
単元	Lessen７ What’s this?			目標	慣れ親しみ：ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。 気付き　　：日本語と英語の共通点や相違点から、言葉の面白さに気付く。

《付けたい力》

【学びにかかわる子どもの実態】	【この単元で付けたい力】	【付けたい力のための活動】
積極的にゲーム等に取り組むが、やり取りや発表となると自信をもって声を出せない。	「What’s this?」の表現を使って、物を尋ねたり答えたりすることができる。	・自分の考えを相手に伝える活動。 ・発音、発声をする活動。

《評価規準》

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
①　意欲的に友達とコミュニケーションをとっている。 ②　主体的に新しい表現を知り、練習をしている。	①　新しい表現を知り、進んで使おうとしている。	①　新しい表現を知り、日本語や他の言語とのちがいに気付いている。

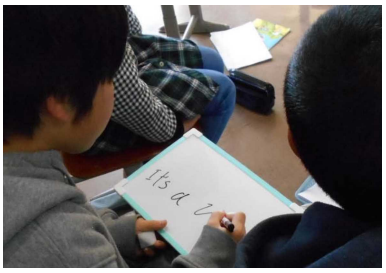
《計画》

	学　習　活　動	評価	場面	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
1	**「What’s this?」の表現を学び、絵に描かれている単語を知ろう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ DVD 教材「Enjoy English!」を視聴し、「What's this?」の意味を考える ・ 新出単語 ・ Let's listen! ・ Let's play! ・ 振り返りシートの記入	気付き 観察・振り返りシート	出会う見通す	・DVD 教材「Enjoy English!」での対話の場面を見て「What's this?」の意味を考える。	・ 教員からの質問に、既習単語や表現を用いて答える。	・「What's this?」の表現を使うことで、これは何かと尋ねられることを知る。
2	**「What’s this?」の表現に慣れ、学校の中にある物の単語を知ろう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ DVD「Enjoy English!」を視聴し、「What's this?」の意味を考える ・ 新出単語 ・ Let's listen! ・ Let's play! ・ 振り返りシートの記入	慣れ親しみ(音声) 観察・振り返りシート	親しむ	・クイズの答えを主体的に考え、「It's a ○○.」で答える。	・ 教員からの質問に、既習単語や表現を用いて答える。	・チャンツをして、発音について知る。
3	**「What’s this?」クイズの準備をしよう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ 教員からのボックスクイズ ・ 次回のアクティビティ「クイズ大会」に向けての話合い ・ 振り返りシートの記入	慣れ親しみ(表現) 観察・振り返りシート	広げる	・クイズの答えを主体的に考え、「It's a ○○」で答える。	・ グループで、どのようなクイズにするかを話し合う。	・「What's this?」の表現をどのようにクイズで用いるのかを考え、練習する。
4	**「What’s this?」クイズ大会をしよう！** ・ warm-up(歌・Small Talk) ・ 単語、表現の復習 ・ アクティビティ「クイズ大会」 ・ 振り返りシートの記入	関心・意欲・態度 観察・振り返りシート	深める	・他のグループが出題したクイズを主体的に考える。 ・クイズを出題する時は、出題する相手のことを意識する。	・「I think」を用いて、自分の考えを相手に伝える。	・学んだ表現を用いることで、これは何かと尋ねられることを知る。

《授業者の振り返り》

- 振り返りシートには「英語はむずかしいけれど、クイズの時に少し話せた」、「コミュニケーションをとると気持ちいいと学んだ」、「グループで積極的に相談できた」等、肯定的な振り返りが多くあった。クイズ大会は児童にとって楽しいアクティビティであり、意欲を高めることができた。
- ただ、児童が考えたクイズは漢字クイズ等、出題の際に日本語を用いるものが多く、できる限り英語を使うことを意識させることができなかった。出題するクイズを、既習単語を使ったスリーヒントクイズに限定する等、できる限り英語を使って学習させるための環境づくりが必要であったように思う。

(イ) 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	【評価規準】（評価方法）
warm-up	・クラスルーム・イングリッシュを用いて、英語を学ぶ雰囲気をつくる。 ・任意の児童に既習単語や表現を用いて質問をし、それに答えさせる。	
単語・表現の復習	・リズムに乗せて単語練習をする。 ・ＩＣＴ教材を活用し、視覚や聴覚に訴える。 ・本時のめあてやルーブリックを提示し、学習の見通しを確認できるようにする。	
ボックスクイズ	・横に穴が開いた箱から手を入れ、中にあるものを予想させる。 ・予想する児童に、クラス全員で「What's this?」と尋ねさせ、「It's a ○○.」で答えさせる。	・箱の中身について、積極的に尋ねたり、答えたりしようとしている。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
次回のアクティビティ「クイズ大会」に向けての話合い	・クイズ大会に向けて、グループで協力してクイズを考えさせる。クイズを出題する際は、できる限り英語を用いるようにさせる。	・出題するクイズについて、できる限り英語を使って出題する方法を考えている。【外国語への慣れ親しみ】
	アクティビティ「クイズ大会」の内容 ３人のグループを九つ作り、それぞれのグループで、クイズを作らせる。クイズを出題する時は、「What's this?」で答えを相手に尋ね、答える時は、「It's a ○○.」で答える。なお、出題するクイズは、スリーヒントクイズ、漢字クイズ、シルエットクイズの中から選ばせることとする。「クイズに答えたい」という思いを引き出すことで、英語が苦手な児童にも積極的にコミュニケーションをとらせることがねらいである。 図５　出題している様子  図６　回答している様子	

振り返りシートの記入	・最初に提示しためあて（ルーブリック）を再度確認し、学習内容を振り返らせる。	

５　研究結果と考察

(1) 児童観察の分析結果

実践①の「クラスの色・形ランキングのトップ３を当てよう！」では、ランキングを当てるという目的を達成するため、楽しそうに他のグループの友達にインタビューする姿が見られた。単なるインタビュー活動ならば、英語が苦手な児童は消極的になってしまうことも予想されるが、このアクティビティは、インタビューできた数が多いほどランキングが予想しやすいため、全児童が時間を持て余すことなく、何度もやり取りをしていた。インタビュー前後に既習の表現を使って挨拶をしようと指示を出すと、「How are you?」、「What’s your name?」、「Good bye.」等の表現を使っている声が聞かれた。また、このアクティビティはグループ単位で行ったため、やり取りに自信がないメンバーに対して、質問の仕方や答え方について教えているメンバーもいた。

実践②の「クイズ大会」に向けての話合いでは、グループでクイズの種類や出題方法について、積極的に話し合っている様子が見られた。前時に教員からの導入として三つのクイズを出題したときも楽しそうに活動していたため、クイズは児童の意欲を高める上で有効な手法であることが見てとれる。グループ単位で出題するクイズを考える際、多数のグループが、英語でのヒントの出し方や、習っていない単語の読み方を、前もって尋ねに来ていた。クイズを出題する側になるという状況下で、「少しでも英語を使いたい」という意欲が生まれていたと言える。当初は、自信がなさそうに活動をしている様子の児童が多かったが、アクティビティを積み重ねる中で、まずはやってみようという前向きな意識をもって活動している姿が見られるようになってきた。

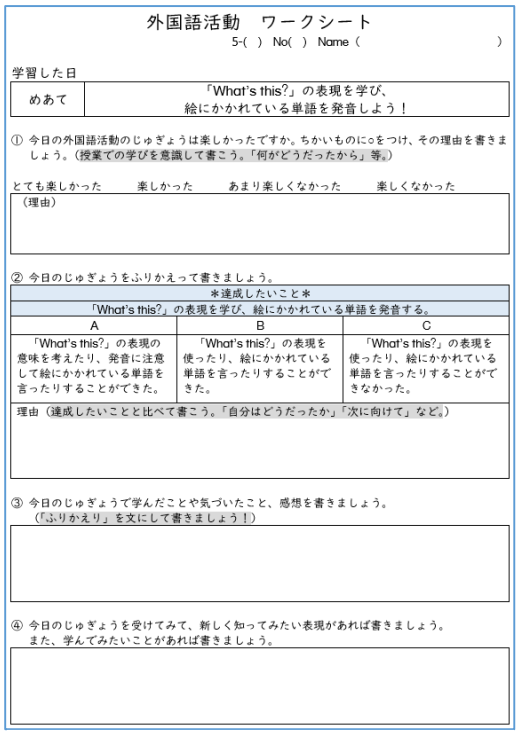
研究開始と同時に、教員自身がクラスルーム・イングリッシュを使ったり、ＩＣＴ教材で単語の発音を確かめたり、リズムに乗せて単語練習をしたりする等、児童が楽しく外国語を学べる環境づくりを意識した。また児童が見通しをもって集中して授業を受けられるように、１時間の流れをパターン化した。児童は、授業の回数を重ねるごとにその環境に慣れ、例えば、「One, two.」という掛け声に続いてめあてを唱えたり、リズム音声が流れると自発的に単語練習をしたりする等、主体的に学習に取り組む姿が見られるようになってきた。

(2) 振り返りシートの分析結果

本研究で使用した振り返りシートには、「今日の外国語の授業は楽しかったですか。」という質問項目があり、「とても楽しかった」・「楽しかった」・「あまり楽しくなかった」・「楽しくなかった」の四つから選択する欄を設けた（図７）。Lessen５（5-1～5-4）で「あまり楽しくなかった」・「楽しくなかった」という否定的な回答をした児童の割合を追うと、１回目からそれぞれ 12.0%、14.8%、7.4%、3.6%であった。Lessen７（7-1～7-4）でもLessen５と同じく、否定的な回答をした児童の割合を追うと、それぞれ17.9%、7.4%、4.0%、3.7%であった。これらの児童の振り返りシートの記述内容に着目すると「自分の分からない単語があったから。」「難しかったから。」という回答が多かった。計画では、単元の前半は新出単語や表現を学んだり定着を確かめたりする活動が多く、後半は学んだ表現を生かしたアクティビティに取り組むことを中心とした。いずれの単元でも、後半に向かうにつれて否定的な回答をした児童の割合は減少しているため、児童にとってアクティビティは魅力的な教材であることと、新出単語や表現が定着していない間は楽しさを感じられない児童もいるが定着とともに楽しさが生まれてくると考えられる。肯定的な回

答をした児童の割合の平均は、Lessen５では 90.6%、Lessen７では 91.8%と大差はないが、「とても楽しかった」と回答した児童の割合はLessen５よりもLessen７の方が 11.0%上昇しているため、全体的に「とても楽しかった」と感じる児童の数が増えていることが分かる（図８）。

また、この振り返りシートには、本時の目標をルーブリック形式で示し、A（達成できた）・B（だいたい達成できた）・C（達成できなかった）の３段階で自己評価する欄も設けた。Lessen５でAと回答している児童が平均 39.6%だったのに対し、Lessen７では平均 49.3%となっており、9.7%上昇している。学んだ表現を使ってやり取りをする等、学習を積み重ねることで自己評価が上がっていったと言える。ただCと回答している児童の割合も、Lessen５では平均 3.9%、Lessen７では平均 5.4%とこちらも上昇している。これは、Lessen７－１でCと回答している児童が 17.9%おり、理由としては、取り扱った新出単語が今までよりも多かったことが考えられる。


外国語活動　ワークシート

5-(　) No(　) Name (　　)

学習した日

めあて	「What's this?」の表現を学び、絵にかかれている単語を発音しよう！

① 今日の外国語活動のじゅぎょうは楽しかったですか。ちかいものに○をつけ、その理由を書きましょう。（授業での学びを意識して書こう。「何がどうだったから」等。）

とても楽しかった　楽しかった　あまり楽しくなかった　楽しくなかった

（理由）

② 今日のじゅぎょうをふりかえって書きましょう。

＊達成したいこと＊		
「What's this?」の表現を学び、絵にかかれている単語を発音する。		
A	B	C
「What's this?」の表現の意味を考えたり、発音に注意して絵にかかれている単語を言ったりすることができた。	「What's this?」の表現を使ったり、絵にかかれている単語を言ったりすることができた。	「What's this?」の表現を使ったり、絵にかかれている単語を言ったりすることができなかった。

理由（達成したいことと比べて書こう。「自分はどうだったか」「次に向けて」など。）

③ 今日のじゅぎょうで学んだことや気づいたこと、感想を書きましょう。（「ふりかえり」を文にして書きましょう！）

④ 今日のじゅぎょうを受けてみて、新しく知ってみたい表現があれば書きましょう。また、学んでみたいことがあれば書きましょう。

図７　振り返りシート

それぞれの回答を選んだ理由については、「クイズを出す時にあまり英語を使えなかったからＢです」、「『What's this?』は言えたけど、発音に気をつけることはできなかったからＢです」等と、本時の目標を意識して記述していることが分かる。また、「次は自分からすすんでしたい」との記述があり、次回への動機付けにもなっていることが分かる。また、回を追うごとに「～ができたから○です。」「～ができなかったから○です」等と、めあてやルーブリックを意識した内容が増えた。

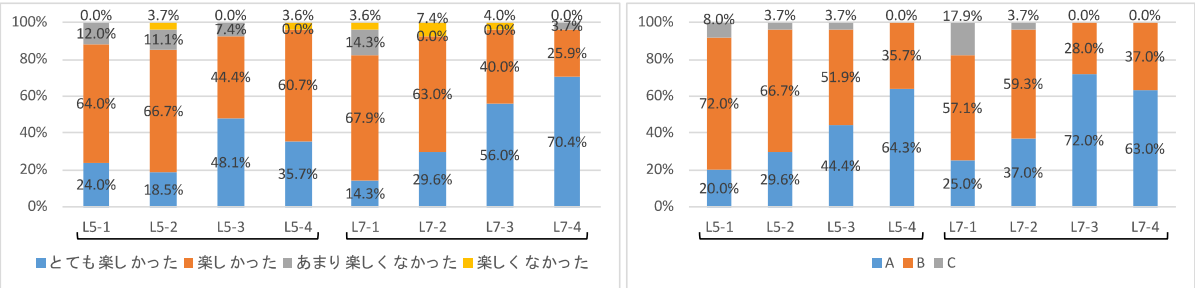


図８　振り返りシートの感想と達成度の結果推移

個人の変化に着目すると、４月当初に「外国語の授業が嫌いだ」と発言していた児童Ａは、回を重ねるごとに、「いろんな事を学べてうれしい」「今日は準備を完ぺきにできたから、クイズ大会が楽しみ」等と、前向きな記述が見られるようになってきた。未だにＡＬＴとやり取りをすることには自信がないようであるが、「先生の外国語ならいいかな」と発言する等、外国語活動に対する意識が変わったようである。

また、研究の開始当初は「フルーツの単語を英語で言えるようになった」のように、単語を覚えられたかどうかを気にしていた児童Ｂは、回を重ねるごとに「今まで思っていた英語と全然違う発音だった」「今までグローブはグローブ、フライパンはフライパンだと思っていたけど、発音

を少し変えるんだなと思った」等の記述が見られ、日本語と英語の発音の仕方が違うことに気付いていったことが分かる。発音については児童Ｃも、「『Ｇ』と『Ｚ』を聞き分けることができなかった」、「違うものだけど言い方が似ているものがあった」等という気付きを深めていた。

(3) 児童質問紙調査の分析結果

児童の意識の変容を測定するため、対象児童に事前（６月）と事後（12 月）に英語に関する 30 項目による質問紙調査を行った。各質問項目については、統計的処理を行うために、４件法を採用した。集計の際には、それぞれの回答について肯定的な回答から順番に「そう思う」を４点、「どちらかといえばそう思う」を３点、「どちらかといえばそう思わない」を２点、「そう思わない」を１点と、１点刻みで高得点のものほど肯定的であることを示すように得点化した。分析には、ＩＢＭ社の SPSS21 を用いた。

取組の前後に実施した同項目の調査の平均値の差が統計的な有意さを確かめるためにｔ検定による分析を行ったところ、次の六つの質問項目においていずれもｐ＜.05 で有意な差が見られた（表２）。「１英語で会話をすることは得意な方だ。」「８だんだん英語がわかるようになってきた。」「15 英語で、もっとうまい言い方や別の表現はないかと考える。」「16 外国語活動の授業の最後に、学習内容をふり返る活動をよく行っている。」「25 英語をたくさん聞いたり話したりすることは大

表２　外国語に関する 30 項目による質問紙調査　ｔ検定の結果

質問項目	N	6月 平均値	6月 標準偏差	12月 平均値	12月 標準偏差	ｔ値	
1 英語で会話をすることは得意な方だ。	28	1.79	0.79	2.14	0.89	-2.07	*
2 英語は、日常生活で役に立つ。	28	2.21	1.03	2.43	0.92	-1.06	
3 英語でコミュニケーションをとれるようになりたい。	28	2.79	0.88	2.96	0.84	-0.93	
4 外国語活動の授業で、分からなかったことが分かったときうれしい。	28	2.71	0.90	2.61	0.79	0.55	
5 外国語活動の授業で、ＩＣＴを使うとわかりやすい。	28	3.43	0.74	3.36	0.78	0.42	
6 英語は、将来自分がおとなになったとき、役に立つ。	28	3.18	0.72	3.04	0.84	0.81	
7 英語を使って、世界で活やくできる人になりたい。	28	2.00	0.77	2.18	0.86	-0.82	
8 だんだん英語がわかるようになってきた。	28	2.25	0.84	2.79	0.83	-2.65	*
9 クラスは発言しやすい雰囲気である。	28	2.50	0.92	2.57	0.88	-0.36	
10 外国語活動は、一人ひとりで勉強する方が好きだ。	28	2.00	1.02	2.29	1.01	-1.35	
11 外国語活動の授業は、テレビ画面やスクリーンを見て学びたい。	28	3.29	0.85	3.29	0.90	0.00	
12 外国語活動の授業では友だちと話すことで、より深く考えることができる。	28	2.57	1.00	2.68	0.82	-0.68	
13 英語を学ぶことは、自分の成長に役に立つ。	28	2.82	0.82	2.89	0.79	-0.44	
14 英語を勉強していると楽しい。	28	2.75	1.00	2.64	0.87	0.59	
15 英語で、もっとうまい言い方や別の表現はないかと考える。	28	1.96	0.74	2.46	1.00	-2.10	*
16 外国語活動の授業の最後に、学習内容をふり返る活動をよく行っている。	28	1.68	0.61	3.00	0.77	-6.85	**
17 自分が話した英語が伝わったり、相手の話す英語が理解できたりするとうれしい。	28	3.14	0.97	3.00	0.94	0.94	
18 外国語活動は、ペアやグループで協力して課題に取り組む活動が好きだ。	28	2.64	1.13	2.93	0.94	-1.31	
19 英語を通じて、日本や海外の文化を理解することは大切である。	28	3.07	0.72	3.14	0.65	-0.42	
20 外国語活動の授業の内容はよく分かる。	28	2.71	0.71	2.86	0.76	-0.78	
21 外国語活動の授業で分からないことがあると、先生に聞くことができる。	28	2.04	0.84	2.14	0.93	-0.47	
22 外国語活動の時間に、先生にほめられるとうれしい。	28	2.36	1.06	2.57	1.00	-1.19	
23 ＡＬＴの先生と英語で話すことは楽しい。	28	2.68	0.86	2.71	0.94	-0.17	
24 英語の歌詞や映画のセリフが聞き取れるとうれしい。	28	2.93	0.90	2.86	0.85	0.39	
25 英語をたくさん聞いたり話したりすることは大切である。	28	2.57	0.92	3.00	0.98	-2.27	*
26 分かる英語がふえると、新しく疑問が生まれてくることがある。	28	2.61	0.88	2.61	1.03	0.00	
27 今、外国語活動の授業が好きだ。	28	2.50	0.92	2.61	1.03	-0.47	
28 新しい英語の表現を覚えると、使いたくなる。	28	2.75	1.04	2.50	1.11	1.49	
29 外国語活動の授業で、その時間の目標（めあて）を理解している。	28	2.46	0.79	3.00	0.77	-3.07	**
30 一度では通じなくても、英語で会話することはおもしろい。	28	2.39	1.07	2.64	1.10	-0.94	

**p<.01 *p<.05

切である。」「29 外国語活動の授業で、その時間の目標（めあて）を理解している。」これら六項目の回答の詳細を表したものが図９である。

有意な差が見られた六項目とも、事後の平均値の方が高くなっていたが、中でも、最初に課題の一つとして考えた、英語でコミュニケーションをとることに対しての自信のなさに関しては、「１英語で会話をすることは得意な方だ。」と「８だんだん英語がわかるようになってきた。」の質問項目に対して、それぞれ平均値で 0.35(8.8%)、0.54(13.5%)の上昇が見られた。

また、深い学びに関わる「15 英語で、もっとうまい言い方や別の表現はないかと考える。」の質問項目は、平均値で 0.50(12.5%)上昇していた。

1 英語で会話をすることは得意な方だ。

6月＼12月	4	3	2	1	6月計
4	1	0	0	0	1
3	**0**	3	0	0	3
2	**0**	**3**	6	4	13
1	**1**	**1**	**6**	3	11
12月計	2	7	12	7	

平均値の差 +0.35(8.8%)　UP 11人・DOWN 4人

8 だんだん英語がわかるようになってきた。

6月＼12月	4	3	2	1	6月計
4	1	1	0	0	2
3	**2**	4	2	0	8
2	**1**	**5**	6	1	13
1	**2**	**1**	**2**	0	5
12月計	6	11	10	1	

平均値の差 +0.54(13.5%)　UP 13人・DOWN 4人

15 英語で、もっとうまい言い方や別の表現はないかと考える。

6月＼12月	4	3	2	1	6月計
4	0	0	0	0	0
3	**1**	2	3	1	7
2	**2**	**4**	5	2	13
1	**2**	**2**	**2**	2	8
12月計	5	8	10	5	

平均値の差 +0.50(12.5%)　UP 13人・DOWN 6人

16 外国語活動の授業の最後に、学習内容をふり返る活動をよく行っている。

6月＼12月	4	3	2	1	6月計
4	0	0	0	0	0
3	**0**	2	0	0	2
2	**3**	**8**	4	0	15
1	**4**	**5**	**1**	1	11
12月計	7	15	5	1	

平均値の差 +1.32(33.0%)　UP 21人・DOWN 0人

25 英語をたくさん聞いたり話したりすることは大切である。

6月＼12月	4	3	2	1	6月計
4	2	1	1	0	4
3	**6**	5	0	1	12
2	**2**	**4**	2	0	8
1	**0**	**1**	**1**	2	4
12月計	10	11	4	3	

平均値の差 +0.43(10.8%)　UP 14人・DOWN 3人

29 外国語活動の授業で、その時間の目標（めあて）を理解している。

6月＼12月	4	3	2	1	6月計
4	0	1	0	0	1
3	**6**	7	2	0	15
2	**0**	**5**	3	0	8
1	**1**	**2**	**0**	1	4
12月計	7	15	5	1	

平均値の差 +0.54(13.5%)　UP 14人・DOWN 3人

図９　有意な差が見られた質問項目の回答別人数の詳細

(4) 考察

ア　「主体的な学び」について

今回、児童が目標を明確に認識し、自身の変容を客観的に見る助けとなるように、ルーブリックを活用し、各時間のめあての提示とともに、「自分が目指すところを考えよう」と声をかけた。振り返り時に、「～が達成できた（できなかった）から、自己評価は…」等と記述していることからも、児童が見通しと目標をもって授業に臨んでいたことが分かる。また今後、外国語科導入に伴ってパフォーマンス評価を取り入れていく上でも、児童が目標を明確に認識する必要性を感じた。児童の学びの過程・指導・評価を一体化して単元計画を作成していくためにも、アクティブ・ラーニングプランニングノートは有効であると考える。

今回の研究では、ねらいとする表現を使う必然性を意識した上でゴールとなる活動を設定し、そこに至るまでに、豊富なやり取りを通して該当の表現に慣れ親しむことができるように工夫した。英語でのやり取りに自信がない児童にとっても、自らコミュニケーションをとりたいと思えるような目的や場面、状況を設定することは、「やってみよう」という意欲を生むことが考えられる。これは、質問紙調査で「１英語で会話をすることは得意な方だ。」と「８だんだん英語がわかるようになってきた。」の平均値が上昇していることからも分かる。苦手意識の低下が見られたことは、今回の取組の成果と捉えたい。

イ　「対話的な学び」について

外国語活動の授業においては、対話なしでは成り立たない。しかし、外国語教育における対話的な学びとは、表面的なやり取りのことではなく、他者を尊重して情報や考えなどを伝え合い、自らの考えを広げたり深めたりすることである。そこで、対話が単なるパターンプラクティスのみに終わらないようにすることを意識して授業を計画した。チャンツや定型のやり取りで語句や表現に慣れ親しませるための活動とともに、イングリッシュ・タイムと名付けた、児童同士で英語のみで短時間会話する活動を行ったり、教員が児童の発言に対して更に質問したりすることで、気持ちや考えを伝え合うという、より実際のコミュニケーションに近いやり取りにつなげることができた。単元が進むにつれ、振り返りシートで「楽しかった」と記入する割合や自己評価が向上していることからも、児童の「聞きたい・伝えたい」気持ちを大切にしてやり取りする機会を設定することの重要性が分かった。

ウ　「深い学び」について

新学習指導要領で述べられている、「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること」という「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現する機会を増やすことを意識して単元を計画し、言語活動を設定した。具体的には、児童が「主体的・対話的」に取り組めるように活動を工夫し、その中で「自分が今伝えたいことや知りたいこと」をアウトプットする機会をもてるように単元を計画した。質問紙調査で「15 英語で、もっとうまい言い方や別の表現はないかと考える。」の質問項目の平均値が上昇していることは、既習事項や新たに気付いたこと等、もてる知識・技能を総動員して、意図したとおりに伝わるように思考・判断・表現しようとする姿勢の表れであると考える。

日本と外国の言語や文化についての気付きや理解については、主に振り返りシートの記述欄から見取った。振り返りを毎回行い、蓄積することで、児童の変容に対してフィードバックする精度を高めることができた。また普段の授業の中で、実際に児童が「なんとかして自分の気持や考えを伝えよう」と語句や表現を選択したり、「なんとかして相手の伝えたいことを理解しよう」と聞き返したりする姿を正確に見取るため、改めて授業中の児童観察の大切さを再認識した。そして適切な声かけをすることによって、児童は外国語でのコミュニケーションに一層意欲をもち、能動的に活動することができることを感じた。

(5) 今後の課題

研究開始当初は、例えばShow & Tell等の発表する活動時に、事前に準備しているにも関わらず、すぐに自分の英語が間違っていないかを確かめようと、教員に助けを求める視線を送る児童の姿が多く見られた。各単元のゴールとなる活動に、英語でやり取りする意味をもたせることによって、児童はより積極的にコミュニケーションを図ろうとするようになった。クイズやゲームを設定することで、児童にとって英語を「コミュニケーションをとるためのツール」に一歩近付けることができたと考える。ただその際、児童が英語と同時に日本語を使用する機会も多くなってしまった。小学校段階では既習の表現が少ないこともあるが、一層英語を使える機会を増やしていきたい。またクイズやゲーム等の活動は、目的をもつという意味で有効であるが、活動に夢中になるあまり、楽しむことが中心となって、児童が遊んでいる感覚になってしまうことがあった。教員が授業を適切にコントロールし、ねらいから外れないようにする必要がある。

現行学習指導要領の外国語活動では「コミュニケーション能力の素地を養う」とされている目標は、今後導入される外国語科では、「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す」こととされており、それは、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して」育んでいくことになる。小学校での基礎の育成と、中学校英語科への円滑な接続を目指して、「聞くこと」,「読むこと」,「話すこと[やり取り]」,「話すこと[発表]」,「書くこと」の五つの領域にわたる資質・能力ををバランスよく育成するため、児童が自らコミュニケーションをとりたいと思うような目的や場面，状況を設定し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に、今後も継続して取り組んでいきたい。

参考・引用文献

(1) 文部科学省（平成20年）『小学校学習指導要領』

(2) 文部科学省（平成20年）『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』

(3) 文部科学省（平成29年）『小学校学習指導要領』

(4) 文部科学省（平成29年）『小学校学習指導要領解説　外国語編』

(5) 文部科学省（平成29年）『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』

(6) 文部科学省（平成28年）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm

(7) 文部科学省（平成29年）『小学校外国語活動・外国語　研修ガイドブック』
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm

(8) 教育課程研究会（2016）『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社

(9) 川井田大輔・楠山研・立岡昌文(2016)『外国語活動における「コミュニケーション能力の素地」を養うための授業づくりに関する実践研究～個への関わりと場の設定の工夫を通して～』（長崎大学教育学部　教育実践総合センター紀要，15，pp.331-341）

(10)直山木綿子(2013)『新版 小学校外国語活動 イラストで見る全単元・全時間の授業のすべて５年』　東洋館出版社